

分裂病者と躁うつ病者のロールシャッハ反応様式*

— <カードX>におけるその対比的考察 —

池田博和¹⁾ 村上英治 武田 徹²⁾

宮本ふみ子³⁾ 真栄城輝明³⁾

I 目 的

われわれ(村上英治他, 1977)は, さきに精神分裂病圏と躁うつ病圏の両二大内因性精神病疾患者のロールシャッハ反応様式のあいだには, いちじるしく相違した特徴が存していることを示唆した。すなわち「精神分裂病圏に属する病者(以下, 分裂病群と略す)においては, いわば『断片化的・困惑的知覚様式』ともいうべきあり方がみられるのに対して, 躁うつ病圏に属する病者(以下, 躁うつ病群と略す)においては, 『相貌化的・合体的知覚様式』ともいうべきあり方がみいだされる」という仮説が設定されるのである。このような臨床的疾患群とロールシャッハ反応特徴との対応の問題は, 創始者のRorschach, Hをはじめとして, 形式分析的にはこれまで無数の研究が積み重ねられてきているが, その大部分は臨床疾患群をまず設定し, それを別の疾患群あるいは統制群とのスコアの比較および統計的有意差の検討という接近法をとっている。しかしながら, そこで導かれる結論は, いわば結果論的な相違の問題であって, 逆にその結論から臨床疾患群としては何に属するのかを同定するにあたっては, 常にかなり大きな危険率が付随するものであることは, たとえばロールシャッハ法に関するいくつかの教科書をマスターしたうえで2, 3年の臨床経験をたんだというくらいでは, とうていロールシャッハ法から臨床診断を下すことはできないという事実においても明らかである。これが, ロールシャッハ解釈はいわゆる「名人芸」であって, 反復可能の「科学的」技法ではないという批判の提起される理由ともなる。

* 本研究の要旨は, 東海心理学会第26回大会(1977)において発表された。

- 1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期課程)
- 2) 中京大学
- 3) 八事病院

また, 臨床的疾患群と「ロールシャッハ反応様式」の対応の問題に関しては, Minkowska, F.(1956)が分裂病者とてんかん者のあいだに, それぞれ「分割」(Spaltung)と「結合」(lien)という相違した特徴がみられると述べている。これはついでに, われわれの本研究と重なる部分も多いのではあるけれども, またいくつかの疑問も提起される場所である。この問題点に関して, そしてさきに述べた仮説の意味, およびわれわれがこの仮説を, 詳細な症例検討において導入するにいたった経緯に関しては, 前出のわれわれの著書にゆずることにしたい。

本研究では, 以上の仮説をある程度, 数量的検討にも耐える症例群のなかで検証したいと思う。しかし, 数量的とはいっても, さきにも述べたように, 形式分析的に分解したスコアの比較検討のみではなく, 60名の対象に関して, いわゆる反応態度や思考—言語カテゴリーも含めてひとりびとりの被験者のひとまとまりになった具体的な反応の全体から, 上記仮説にもとづく基本的反応様式をわれわれ, 5名が独立に評定し, その信頼性を検討するという形式で, この仮説の妥当性を検証することを試みたいと思う。このように, ロールシャッハ法から基礎的疾患様態に関して把握しうる視点を強化することは, 臨床実践上, ことに精神療法的に, また精神薬理学的にも重要な意味を有するものであると考えられる。

II 方 法

1. カードXの意味

まず, ここで検討する具体的な反応は, <カードX>におけるものに限定しておくことにしたい。というのは, すべての対象者の全プロトコルをすべてあげて考察するのはあまりにも膨大となるためでもあるけれども, もっと積極的な理由としては, このカードXが特別な意味と図版特性とをもっていると考えられるためでもある。すなわち, 第1にはこのカードはほかのどのカードより

分裂病者と躁うつ病者のロールシャッハ反応様式

表1 分裂病群各被験者の臨床像とロールシャッハ・カードXにおける反応の概要

症 例	A) 性別	B) 年齢	C) 初発年齢	D) 下位診断類型	E) 主 症 状	
S-1 S・K	男 性	25	21	破 瓜 型	不眠, 無為, 自閉, 無関心, 自発性減退, 妄想気分, 被害・関係妄想	2" 色に関しては, 黄色がなさい, 信号ですか, 横断
S-2 K・A	男 性	26	20	破 瓜 型	無為, 自閉, 自発性減退, 家出, 徘徊, 自殺企図, 注察妄想	8" ここまでくると, 複雑与える。バラバラで, 互い
S-3 S・K	男 性	28	16	破 瓜 型	無為, 自閉, 感情鈍麻, 独語, 幻聴, 支離減裂, 人格水準低下	18" 3回目の入院のときに,
S-4 N・Y	男 性	25	18	破 瓜 型	無為, 自閉, 感情鈍麻, 独語, 空笑, 刺激性興奮, 人格水準低下	10" 精神分裂病の患者がみ絵はないですね, 説明のし
S-5 Y・F	女 性	26	21	破 瓜 型	無為, 自閉, 無関心, 感情鈍麻, 支離減裂, 関係・家族否認妄想, 人格水準低下	7" 小学生的な, 凶工的な学生ではかけないというこ
S-6 K・Y	女 性	38	25	破 瓜 型	無為, 感情鈍麻, 自明性喪失, 幻聴, 独語, 空笑, 人格水準低下, 刺激性興奮	7" 昆虫の収集。(カブトか? (水から出て分離した
S-7 U・Y	男 性	31	28	破 瓜 型	自閉, 自発性減退, 妄想気分, 関係・被害妄想, 人物誤認, 人格水準低下	1' 35" 女の性器みたい, ポトッとおとしたような。
S-8 M・R	男 性	23	19	破 瓜 型	不安, 無為, 離人感, 自発性減退, 自己破局体験, 関係・注察妄想	3' 妹が油絵しているようにじにしてかいている。妹に
S-9 I・K	男 性	30	25	破 瓜 型	不眠, 不安, 離人感, 無為, 他者侵入妄想, 「テレパシー」	3" これは海中のインギン景ですね)
S-10 T・A	女 性	28	23	破 瓜 型	不眠, 不安, 焦燥感, 強迫観念, 幻聴, 被害・関係妄想, 支離減裂	10" 少年が牛とすもうとり(怪獣がヒスおこして角た
S-11 U・H	男 性	26	20	破 瓜 型	独語, 空笑, 不穏, 被害・関係・家族否認妄想, 支離減裂	25" 女性を思いだします。でみてるだけみたいです。
S-12 Y・K	男 性	26	22	寡 症 状 型	頭重, 焦燥感, 無為, 妄想気分, 関係念慮, 刺激性興奮	4" 子供の絵。(幼稚だか黄色, 好きな色だから) 童
S-13 H・S	男 性	19	19	寡 症 状 型	不眠, 不安, 強迫観念, 焦燥感, 被害・関係・注察念慮	8" お化け。何とも思う
S-14 S・S	男 性	23	17	寡 症 状 型	不登校, 家族内暴行, 昼夜逆転生活, 空笑, 非現実的理想形成	3" 魚の内臓がバラバラに
S-15 I・K	男 性	22	20	寡 症 状 型	不眠, 焦燥感, 自明性喪失, 強迫観念, 注察念慮, 非現実的理想形成	50" 抽象的なものが直感的で酵素とアンチ酵素のよう
S-16 M・N	男 性	18	18	寡 症 状 型	不安, 不登校, 強迫観念, 自殺企図, 被害念慮, 非現実的理想形成	23" 能面。(歌舞伎にでてて変態) トーテンポール。
S-17 Y・M	男 性	22	21	寡 症 状 型	頭重, 無為, 自閉, 無気力, 緘黙, 自発性減退, 妄想気分	10" サーカスのね, 道化師ね, 鼻。鼻って鼻のヒゲ,
S-18 S・Y	男 性	20	19	寡 症 状 型	無為, 自閉, 無関心, 自発性減退, 緘黙, 独語, 妄想気分, 自殺企図	8" クモが2ついるみたいチか何かの影絵。色あいが
S-19 H・Y	男 性	23	21	寡 症 状 型	不安, 不眠, 焦燥感, 強迫観念, 徘徊, 幻聴, 被害・関係・恋愛妄想, 妄追想	10" 何だかわっかせん。トの発射台かな。知能指数
S-20 S・S	男 性	20	18	寡 症 状 型 (行為化型)	無為, 自閉, 無関心, 放火, 暴行, 被害・関係・注察妄想, 感情鈍麻	15" 気違いのかいた絵・イ
S-21 M・M	男 性	19	19	寡 症 状 型	不眠, 不安, 自発性減退, 不登校, 関係・他者侵入念慮	30" わかりません。本当に
S-22 K・Y	男 性	18	18	偽 神 経 症 型	無関心, 自発性減退, 自閉, 自己臭, 注察妄想	38" わかりません。
S-23 M・S	男 性	22	16	偽 躁 う つ 病 型	不安, 無為, 自発性減退, 不穏, 強迫観念, 自明性喪失, 気分変調	8" 派手! 派手ですね。
S-24 M・J	男 性	23	17	偽 躁 う つ 病 型	不眠, 不穏, 感情昂揚, 刺激性興奮, 徘徊, 性的問題行動, 自殺企図	3" 不均衡, アンバランス和がとれてないですもんね。
S-25 H・M	男 性	21	15	偽 躁 う つ 病 型	不眠, 不穏, 刺激性興奮, 爽快気分, 抑うつ, 非現実的理想形成, 自殺企図	3" 分裂的なまとまらないありません。(何にもない
S-26 A・K	男 性	22	19	妄 想 反 応 型	不眠, 不安, 恐怖感, 徘徊, 感情高揚, 自明性喪失	4" 吹き絵。(フッフーハンカチ。(風にふかれて
S-27 U・K	男 性	25	19	妄 想 反 応 型	不眠, 不穏, 多弁, 多動, 焦燥感, 刺激性興奮, 「テレパシー」, 誇大念慮	3" これも, ようわからんいるから)
S-28 O・H	男 性	27	22	妄 想 反 応 型	不眠, 不穏, 焦燥感, 自発性減退, 抑うつ, 被害・関係妄想	8" 非定型精神分裂にみえ大きく両手をのぼしとるよ
S-29 S・T	男 性	20	19	妄 想 反 応 型	不眠, 不穏, 焦燥感, 刺激性興奮, 妄想気分, 関係・誇大妄想	8" きれいな花火が爆発しんでわからない。いろんな
S-30 T・M	男 性	27	23	妄 想 反 応 型	不眠, 不安, 幻聴, 被害・関係妄想, 徘徊, 自発性減退	7" 人がたくさん踊っている色ですね。気違いが絵の具

F) ロールシャッハ・カード X における主な反応 (カッコ内は質疑段階)	G) 知覚様式の評定 (評定者間の一致数)
ふえたと思います。それと茶色、それと青ですか。それがふえて落ち着きがなくなるようです。黄色は勿論、注意し歩道の「注意」を連想します。 — 1' 10"	断片化的・困惑的 (5人一致)
怪奇で何とっていいか、お化け屋敷って感じ、パッとみた印象で人を恐怖におとし入れる。(全体的に恐怖感をつながりが無い、そこに疎外だとか、孤立してそれぞれが勝手にやっているような感じ) — 1' 5"	断片化的・困惑的 (5人一致)
Tさんという人が、ちょびヒゲをはやしたその人が、絵の本をみているときに、チラッとみた絵に似ている。 — 1'	相貌化的・合体的 (4人一致)
るような絵ですね、それがアル中患者のかいたような。(正常な人がみたら、分裂病になっちゃうような、こんなようがない) 魚に手が出て、足が3本あって、何かいいかげんなあれですね。 — 1' 50"	断片化的・困惑的 (5人一致)
絵。最後まで何をかこうとしているのかわからないけど、不思議でしょうがない。私のわからん絵だと思う。(小とを意味している。想像にまかせたいところ) — 1' 2"	断片化的・困惑的 (5人一致)
虫、これそっくりみたい。ピンでピピッとやっていく、イモムシ、水スマシ) 火と水の精、火と光とは一緒ですものが、こうなって、全部が火と水の精みたい) — 1' 30"	断片化的・困惑的 (3人一致)
ここんとこ。(性器をこう開いたみたい、Ds 15 が性器、開いたというのは、はっきりしません) 用紙に絵の具を — 1' 55"	断片化的・困惑的 (4人一致)
な感じで、最初は白と黒で塗りつぶしたんですけど、あとで赤と青と黄を入れて、その前の絵よりも、くずれた感はいろんな迷惑かけたなあと思います。小遣いがなくなったもので、5千円もらったり云々 — 1' 38"	断片化的・困惑的 (5人一致)
チャクとか熱帯魚とか、それが泳いでいる。南の海の中ですね。(魚やプランクトン、南海のきれいな海の中の状況) — 48"	相貌化的・合体的 (5人一致)
やっている。キツネが座りこんで、キツネの後から怪物が背中合わせて座りこんで、ひっぱり込もうとしている。てて、馬にみえたり少年にみえたり、ヒスおこしたおじいさん云々) ネズミが見合いして泣いている。 — 1' 38"	断片化的・困惑的 (不一致→協議)
何かコマースの「フラフラ・フルール」ですか。何か感情が、自分の感じが奥にすりこまれてなくなって、隋性動物を思い出します。どうしてこういう地球という星があって、水分ができるのかわかる絵です。 — 4'	断片化的・困惑的 (4人一致)
ら。まとまりがないし、カラフルで……) 華麗。(はなやかな感じ、D1が花火みたい、広がっている感じ、それとか心。(ちょっとわからない。無邪気な絵にみえたのかな) — 25"	断片化的・困惑的 (5人一致)
かばない。(目、鼻、顔の外形、奇妙ってことから) — 30"	断片化的・困惑的 (5人一致)
なっております。(やはり上の方です。よくわかりません) — 40"	断片化的・困惑的 (5人一致)
に捉えにくい絵です。イギリスの紳士にみえます、ヒゲをはやしたイギリス紳士の顔。人間の体内とかそういう中なものが戦っている。ブルドックの顔、何か内面的にこうまとまりがない。 — 6' 10"	断片化的・困惑的 (5人一致)
くる顔に色をぬる。派手にぬってあるから、目がみる時によってかわる。目が青で、真赤な髪の毛、ヒゲをはやし(人の顔をトーテンポールにしてあるから理解できないことをほりつけてある、威圧というかわい顔) — 1' 13"	どちらともいえない (不一致)
の顔。他にはないです。(これむつかしいけど、テレビみてて連想したの、テレビの画面思いだして。その辺がこの辺が目。何かかわってる) — 35"	どちらともいえない (不一致)
にみえる。やっぱり何か動物の魚拓みたいにみえる。ア리가2匹いるみたい。(気持ち悪い何かの怪物) 動物のイタカラフル。ちょっと気持ち悪いみたいな感じ、全体的に気持ち悪いみたいな感じ。 — 1' 10"	断片化的・困惑的 (5人一致)
昆虫の顔にみえます。何かいりみだれとるといっか、心が散らばっている、バラバラ。何ももてこない。ロケッわかっちゃうな、こんなことやっていたら。 — 1' 10"	断片化的・困惑的 (5人一致)
ソギンチャク。(赤いところ、他は虫で、入ってくるのをとろうとしている) — 45"	断片化的・困惑的 (3人一致)
シミみたいだから、何にみえるといったってわかりません。 — 38"	断片化的・困惑的 (5人一致)
— 40"	どちらともいえない (3人一致)
ほかにないです。 — 10"	断片化的・困惑的 (4人一致)
という感じですね。阿呆の集団というか、愚衆の政治というか。(これはあまりゴチャゴチャありすぎたもので、調こんなゴチャゴチャ色があるのはいっぺんに嫌だなあというムカつく感じ) — 25"	断片化的・困惑的 (5人一致)
ものがありますね。ここだけみると、人間の気管支につながっている肺、解剖したとこのように。絵全体としてはね。本当にこれ、ただバラバラに散らばった絵で整理整頓されていない、非常に汚い絵だね) — 1' 20"	断片化的・困惑的 (5人一致)
とやって) クリスマス・ツリー (バーなんかでよくやっているでしょう) 狼。(目が白くて、口ばしが長くて) ヒラヒラしているところ) — 32"	どちらともいえない (不一致)
な。色がつくと、俺駄目なんだ。汚いわこれ、汚い、なし! (あまりにも多色ずりだから汚い、ゴチャゴチャして) — 20"	断片化的・困惑的 (5人一致)
ます。ノミが2匹います。シラミが2匹います。(毛ジラミみたいですね) わかりません、あの緑色をした人間が、うにみえます。(ポパイみたいな人間です) — 1' 50"	断片化的・困惑的 (4人一致)
たときみたい。何だろうな、全然あとわかりません。滅茶苦茶の汚らしい絵だなと…… (D1+1だけ、あとのはのがありすぎて、青あり赤あり黄色ありで、けばけばしすぎる) — 50"	断片化的・困惑的 (5人一致)
る感じがします。あとは別に…… やっぱ悲惨な感じもします、それと支離滅裂という感じも。(全体の構成、で滅茶苦茶かいたような) — 1'	断片化的・困惑的 (5人一致)

分裂病者と躁うつ病者のロールシャッハ反応様式

表2 躁うつ病群各被験者の臨床像とロールシャッハ・カードXにおける反応の概要

症 状	A)性別	B)年齢	C)初発年齢	D)下位診断類型	E)主 症 状	
Z-1 Y・H	男 性	38	30	両相性躁うつ病	不眠, 多弁, 多動, 感情昂揚, 刺激性興奮, 徘徊, 思考奔逸	3" 非常に美しい, だから というものも連想できます
Z-2 K・S	男 性	59	48	両相性躁うつ病	不眠, 不穏, 多弁, 多動, 感情昂揚, 抑うつ	13" これが昆虫にみえるん すね。(全体としてひとつ
Z-3 O・T	男 性	36	35	両相性躁うつ病	不眠, 不安, 多弁, 多動, 妄想気分, 感情昂揚, 思考奔逸	2" ああ, これは色々な ような, 動物にたとえれば
Z-4 N・M	男 性	38	35	両相性躁うつ病	不眠, 不安, 抑うつ, 緘黙, 悲哀感情, 多弁, 多動, 感情昂揚	18" これもわかりません。
Z-5 M・J	男 性	45	31	両相性躁うつ病	多弁, 多動, 感情昂揚, 思考奔逸, 徘徊 誇大的, 抑うつ	3" これも植物です。百 春です。ね, 小鳥なき, 花咲
Z-6 Y・K	男 性	32	30	両相性躁うつ病	不眠, 不安, 多弁, 多動, 焦燥感, 感情 昂揚, 思考奔逸, 妄想気分	3" うわあ, これ一番むつ こうやっているみたい。あ
Z-7 T・F	男 性	46	46	両相性躁うつ病	多弁, 多動, 感情昂揚, 刺激性興奮, 徘徊, 妄想気分	35" あのう, 一部分だけで です。ね。
Z-8 T・T	男 性	31	31	妄想性躁病	妄想着想, 関係・被害・好訴妄想, 多弁, 感情昂揚	8" これまた大部こってき ところザリガニ, こくら分
Z-9 A・H	男 性	23	23	妄想性躁病	関係・被害・注察妄想, 幻聴, 感情昂揚	1'25" 無理矢理みちゃう てお互いに助けあって, 落
Z-10 I・R	男 性	42	33	単相性うつ病	不眠, 不安, 抑うつ, 悲哀感情, 自信喪失	20" これですか。これも何 (何が似とるかな, これは
Z-11 S・J	男 性	38	34	単相性うつ病	不眠, 不安, 焦燥感, 抑うつ, 悲哀感情 自信喪失, 妄想気分, 嫉妬念慮	10" これは墓標にね, そこ はカブト虫みたい)
Z-12 T・C	女 性	49	48	単相性うつ病	不眠, 頭重, 抑うつ, 妄想気分, 関係・ 被害・罪業念慮	58" 虫がいっぱいいるよう なに平たかない, 人間かし
Z-13 K・M	男 性	47	46	単相性うつ病	不眠, 不安, 抑うつ, 自信喪失, 悲哀感 情, 妄想着想, 関係妄想	4" これまたあれですわ, モトかガとか。(こんな整
Z-14 S・K	女 性	51	48	単相性うつ病	不眠, 不安, 恐怖感, 焦燥感, 抑うつ, 妄想気分, 関係・被害妄想	8" 両側はクモの巣のよう いる感じ。下の方がネズミ
Z-15 I・F	女 性	59	56	単相性うつ病	不眠, 不安, 焦燥感, 抑うつ, 悲哀感情 思考抑制, 貧困妄想, 自殺念慮	60" これは何か虫みたいに はないんだね, 虫の名前を
Z-16 T・Y	男 性	45	44	妄想性うつ病	不眠, 不安, 焦燥感, 妄想気分, 妄想着 想, 幻聴, 被害・関係・追跡妄想	2" 真中がやっぱり何か動 ね。(口ばしが長いような
Z-17 I・K	男 性	18	18	非定型精神病	不眠, 不安, 強迫観念, 焦燥感, 妄想気 分, 関係・血統妄想	10" 誰かに人間がつりあげ のがあります。それが僕で
Z-18 O・S	女 性	48	40	非定型精神病	不眠, 不安, 多弁, 多動, 徘徊, 妄想気 分, 高揚気分, 抑うつ, 妄想気分	4" 極楽園, 極楽園へいく にはない明るさがある。で
Z-19 Y・F	女 性	31	17	非定型精神病	(産褥後)不眠, 不安, 不穏, 徘徊, 被害・ 関係妄想	8" 色とりどりに散らばっ ひきつけられるように群が
Z-20 K・Y	女 性	16	16	非定型精神病	不眠, 不安, 幻聴, 精神発作, 体感幻覚 思考化声, 妄想気分, 作為体験	6" 小学校の美術で, 絵の だけが冠のようにみえるん
Z-21 K・M	男 性	32	30	非定型精神病	不眠, 不安, 焦燥感, 徘徊, 感情昂揚, 妄想気分, 被害, 関係, 誇大, 血統妄想	8" これはやっぱり人間が 病院に入るとるようなD1
Z-22 Y・S	男 性	32	28	非定型精神病	不眠, 不安, 焦燥感, 抑うつ, 感情昂揚 多弁, 多動, 被害・関係妄想	18" 色が合成されとる感じ (D5+5 は人間にたとえて,
Z-23 M・N	女 性	40	37	非定型精神病	不眠, 不安, 恐怖感, 焦燥感, 多弁, 思 考奔逸, 妄想気分, 被害・関係妄想	11" これはアブラムンがお いるじゃない。ニョロッと
Z-24 S・Y	女 性	33	32	非定型精神病	不眠, 不安, 焦燥感, 幻聴, 独語, 作為 体験, 妄想気分, 被害・関係・注察妄想	5" これはいろんな昆虫と とかが集まっている。形が
Z-25 M・N	男 性	22	21	非定型精神病	多弁, 多動, 感情昂揚, 刺激性興奮, 徘徊, 思考奔逸, 妄想気分, 誇大妄想	63" 何にみえるいったって, 物が合体しあう, 心と心が
Z-26 S・F	女 性	29	26	非定型精神病	不眠, 多弁, 多動, 感情昂揚, 刺激性興 奮, 徘徊, 幻聴, 関係妄想	8" 色とりどりに, きれい。 黄色い。充血して目が赤く
Z-27 K・Y	男 性	42	40	非定型精神病	不眠, 不安, 抑うつ, 妄想気分, 被害・ 関係妄想	3" こればどうも色がけげ ている感じです。昆虫が遊
Z-28 F・T	男 性	31	31	非定型精神病	不眠, 不安, 頭重, 思考抑制, 幻想, 幻 聴, 被害・関係妄想	40" やっぱり花に虫が, 昆 のが昆虫にみえるんですね。
Z-29 K・K	女 性	29	28	非定型精神病	不眠, 拒絶症, 幻聴, 妄想気分, 作為体 験, 被害・関係・追跡妄想	8" これはネズミかな, ク のおとき話にでてくる毒り
Z-30 K・Y	男 性	47	32	非定型精神病	不眠, 幻視, 幻聴, 妄想着想, 体感幻覚 被害・関係・血統・誇大・発明妄想	12" プライヤーかペンチ。 2つあいむかいになってい

F) ロールシャッハ・カード X における主な反応 (カッコ内は質疑段階)	G) 知覚様式の評定 (評定者間の一致数)
動物の世界のお祭りがこんな感じじゃないですか。クモもイモ虫も参加している。非常にはなやか、だから、希望ね。人間の世界のお祭りも連想させて、夏祭りの浴衣とかちょうちんの灯とか非常に豊かな感じ。 — 2' 50"	相貌化的・合体的 (5人一致)
ですけど、これも爬虫類にみえるんです。こちらへんは何を意味しているのかは……まあ色として美しいと思いまの美しい抽象画であると、かいた人しかわからないという絵のようにみえます) — 1' 30"	相貌化的・合体的 (3人一致)
ようですね。そうですね、ブルーのはカブト虫、くらいネズミ色はカモシカか何か、上の緑はウサギがとんでいる — 55"	どちらともいえない (4人一致)
— 20"	どちらともいえない (5人一致)
姓がしたいですねえ。植物園！植物園の植物なんてバカバカしくて、やっぱり天然の植物でないとねえ。これ、もうき、畑の上からヘリコプターでね、ずっと知多半島の方をいくと、こんなきれいな春ですね。 — 35"	相貌化的・合体的 (4人一致)
かしいよ。抽象的でね、僕には意味がとれない。これ何かお祭りのね、盆おどりみたいなことで、柱を2人の人がとこれ病原菌が、衛生学の実験でやったけど、培養器の寒天に繁殖させるとこんな感じになりますね。 — 2' 20"	相貌化的・合体的 (4人一致)
すね。この部分だけ。この部分わりとおもしろい。虫がこれに登ったような感じですね。それから……そんなとこ — 1' 20"	相貌化的・合体的 (5人一致)
たというか、複雑になってきた絵で、この2つが玉子焼きを連想します。この赤いのが竜の落とし子、この青い裂的な、支離滅裂な感じ。前衛的なイメージ、偶発的なものによって美を表現する抽象派の絵画…… — 2' 40"	どちらともいえない (3人一致)
と、赤いのが崖と崖で、人間がさかさまになって落ちそうになっている。4人くらいいて、他の人間が支柱をたてちないようになっている。ともかく、空にむかって落ちないように助けあっている。 — 2' 10"	相貌化的・合体的 (4人一致)
にみえるかということとはわからないですけども、左右全く一緒ですね。色は緑、青、黄、赤、ネズミ、ダイダイクモの巣のような形とるんじゃないですか。クモはどこにおるかわからないけど……) — 1' 10"	断片化的・困惑的 (4人一致)
へ獣たちが我さきにこうとしているように思います。それだけです。(幕標めがけて獣たちがいくような。これ — 40"	相貌化的・合体的 (5人一致)
な感じ。(この色が虫、これも虫ね。ひげやら足、でもここ目玉があるでしょう。何だろうと思って、蛙ならこちら。犬がいっぱいくっついてるから、助けて下さいという感じ、ご免なさいって云々) — 1' 20"	相貌化的・合体的 (3人一致)
ピカソの絵がかいてあるような感じがしますね。それから、足の多いケモノが花にとまっている感じがします。偶然と両側にとまっているとは、考えようがないけど……) — 50"	相貌化的・合体的 (5人一致)
に思いますし、真中にこわい顔ですね。赤鬼が両手をひろげて、クモをつかまえているように見えます、つかんでのようにはみえますし、逆さに見てもネズミが2匹…… — 1' 25"	相貌化的・合体的 (4人一致)
みえますけど、これね。…やっぱり人じゃないですか。あとわかりませんが。(クモといったけれども、クモでよく知らないけど……困っちゃう。人は首をたれて、手で何かをもって……やっぱり虫ですね) — 1' 58"	どちらともいえない (4人一致)
物のような感じしますね。これはバッタのような感じ、羽はないけど。横のやつがグロテスクな目にみえますけど感じ、足が2本で、背中に荷物せおったようにもみえるね、うすい方がね) — 1' 20"	相貌化的・合体的 (4人一致)
られているみていです。天国へいくそうです。僕は天国へいきます。僕の運命はよい運命です。中に人間らしいもす。上は天国、下は地獄、人間生きるのにイバラがたくさん、ようけあります云々 — 2' 50"	断片化的・困惑的 (4人一致)
までの途中の地獄凶。極楽園へいく前に、神に対して救いを求めている。(色彩がきれいというか、あざやか。他もやっぱり暗いから、極楽園へいくにはずい分苦しい思いをしなければいけないという地獄の悟りかな) — 2' 18"	どちらともいえない (不一致)
たような、霧吹きしたみたい。きれいにあちこちから、皆がひとつのものを頂点に、たくさん出てくるような、ってくるような。雑談しているみたい、ひとつの広場に集まってきた、何だか自然な感じがします。 — 3' 40"	相貌化的・合体的 (5人一致)
具をポタポタたらしかいたような絵にみえます。この赤いところがこわい王様。(パッと目につくんです、これです、赤い色がこわい) 上になにか兵隊、ヤリをもっているみたいで、頭の上ののっかって。(小悪魔) — 2' 10"	相貌化的・合体的 (4人一致)
踊るととこにみえます、乱舞しとるとこに、手にかざりもって。その他は感じません。(普通の人間です、このかざり) — 30"	相貌化的・合体的 (4人一致)
ですね。何かこう、支えあつるといいうんですかね。妥協というか、そんな意味もあるような。それぐらいですね。感じがよく似ている。D3+3の感じで小さなものにとえたら帽子とかそんなものをもっている感じ) — 1' 45"	相貌化的・合体的 (4人一致)
ったり、サンゴみたいなものもあるし、そういった感じ。(海底の中みたい。水色だね、全部がね。こういうのがしたサンゴ、こういう格好、アブラムシは別にいい) — 31"	相貌化的・合体的 (4人一致)
か爬虫類がウヨウヨ集まっている感じ。何か気持の悪いものの集団みたい。(みんな昆虫とかバイ菌とか、爬虫類グロテスクなと、不気味な色あいだから、気持が悪い) — 30"	相貌化的・合体的 (4人一致)
物体と物体が合体した感じ。(左みたいな感じで、こうとけあう、この辺がとけあう感じ。わけのわからん生きふれあう、ほかのとも一緒、虫が一緒だから) — 2' 45"	相貌化的・合体的 (4人一致)
ネズミがお話してる、チューチューどう話すか。これ女の子、仮装舞踏会。女王様、冠で。これ鬼みたい、目があることはあるけど、黄色くなるってことあるかしら。あ鼻にみえる、ピカソだ、ネズミはケンカ云々 — 2' 50"	相貌化的・合体的 (4人一致)
けばしくて、まとまらない感じの凶形で……しいていえば、パリのエッフェル塔の下で、いろんな昆虫がうごめいているような絵ですね。(地面の下ですね) — 1' 20"	相貌化的・合体的 (3人一致)
虫かね、ああいうものが飛んできて、とまろうとしている感じ。(D5+5が花、赤い色がついているし、こういう密をすいにきた感じ) この青い方がクモにみえますね。(手足がたくさんついているので) — 1' 18"	相貌化的・合体的 (3人一致)
モカナ。真中は男の人かな、女ではない。男の人にネズミとクモがくっついているみたい。いじわるな、昔の西洋ソングを食べさせるような、おばあさんが2人いる。こうみると、羊の顔にみえる。 — 2' 55"	相貌化的・合体的 (3人一致)
これは一ツ目小僧、これはトリの肉、赤いのは唐揚げ。竜の落とし子みたいなのが、くっついていくような。鳥が。天使が舞っている。向きあって話しているのかもしれない。アヒルがくっついて上むいている。 — 4' 30"	相貌化的・合体的 (4人一致)

も複雑で明瞭に分離した部分領域が多く、豊かな色彩が用いられていて、一般に反応数も多く content-variety にもとんでいる点があげられる。さらに継起分析の視点からも、このカードは最初のカードⅠや中間のカードⅤ以上に、最終カードということでの特殊性を有している。つまり、多彩な色彩はすでにカードⅧから出現していて color への shock はもはやそれほど深刻ではなく、またその前のカードⅨは形態的にはかなりまとめにくいものであって、その直後に出現し、しかもこれで最後であるという一種の安堵感ともいったものが出やすいことからこのカードⅩにおいては比較的素直に被検者の知覚体験や反応態度が表明されやすいと考えられるのである。実際以前からわれわれは、少くとも経験的には、このファイナル・カードにおいて、いわば全反応のしめくりともいうべき形で、被験者のよりその人らしい姿があらわされてくるものであると感じてきたところでもある。またこのカードは、今述べたように複雑に分離した部分領域が最も多く、部分反応カードではあるけれども、他方、それらの部分が全体的にあるまとまりをもっていて、抽象反応や自然反応の形で organize される傾向も有していることは、一般に認められていることである。しかしその反面、このカードはあまりにも複雑多彩で分散的であるために、一群の人々にとっては、もはや対処しきれないで、いわばお手あげともいうべき最も苦手なものともなりうるのである。

このようなカードⅩの凶版特性は、われわれの両二大疾患群における「断片化的・困惑的知覚様式」対「相貌化的・合体的知覚様式」という仮説を検討するのにあたって、最も端的にこれらの様式がこのカードにおいてあらわされてくるものであることを推論させるわけである。これがわれわれの検討にあたってカードⅩを選んだ理由にはかならない。

2. 対 象

ここで対象としたのは、分裂病群、躁うつ病群各30名計60名である。この60名を選ぶにあたっては、まず両群に属すると一応診断されるケースの中で、われわれクリニカル・サイコロジストが永年にわたってかかわっていて、彼らの臨床像や背景の生活史がすでに明確になっている症例をできるだけ多数あげ、その中から次の疾病論的診断基準に照らして、少しでも問題のあるものは除いていき、最も確実にこの基準に該当するものから順に、両群各30名を選択するという方法がとられた。すなわち分裂病群に関しては、「単一型」及び「破瓜型」のいわゆる Kernschizophrenie が中心であり診断論的に不純なものを含みやすい「妄想的」や「緊張型」はのぞかれ

ているが、症状論的にはなく、「基礎過程」的にはこれと全く一致すると考えられる「偽神経症型」や「偽躁うつ病型」（池田博和、1976）はこの中に入れられている。他方、躁うつ病群に関しても、やはり同様に「基礎過程」としてこの疾患に属していると考えられるもののみ限定されているが、症状論的には、いわゆる「両相性躁うつ病」および「単相性うつ病」（すなわち「メラニコリー」）と「非定型精神病」とを含んでいる。この非定型精神病は、狭義には「類てんかん性精神病」と呼ばれるものに類似した疾患群であるが、ここでは躁うつ病を広義に解釈し、このうちに含めることにする。基本的な知覚様式に — 従って、基礎的存在様態に — 関してはこれら両者の間にあえてとりたてていべきほどの相違が存しているとは考えられないからである。

3. 知覚様式の評定

これら両群60名に対して、ロールシャッハ法を正規の手続きで実施した。それらプロトコルのカードⅩにおける反応の主要なものは、表1、2のF)欄に示したとおりである。これをひとまず名大スケールによってスコアし、形式分析的に比較検討してみることにする。しかし、さきにも述べたように、これだけでは決して充分とはいえないので、次にはむしろスコアリングにはよらず、生の具体的な反応そのものから、われわれの仮説にそって、そこにあらわされている被験者の基本的な知覚様式を直接に捉えようとする接近を試みていくことにしたいと思う。すなわち、60名の被験者のカードⅩに対する反応記録のみを記したカードをランダムに呈示し、各被験者の基本的な知覚のあり方が、われわれの仮説に関してその両知覚様式のどちらに、あるいはそれらの「どちらでもない」のどれに属するのかを、いわば直観的にわれわれ5名が独立に評定することにした。そのさい、両知覚様式の具体的な基準としては、これら両様式を典型的に代表していると思われる次の例示のみが示された。

断片化的・困惑的知覚様式

「3' 八 これは非常に、絵としては分裂的な、こう、まとまらないものがありますね。細部だけはわかっていますが、まとまって出ているものはないという感じがしますね。……そうですね、これは何も絵になっていないような感じですね。ただ点々が落ちているだけで、絵にはなっていない……ただ華やかな色模様という感じですね、この中心部だけ、このとこみると、人間の気管支につながっている肺、とこうなるんだけれども、解剖したとこのように、ここの感じますね……しかし、絵全体としては何もありません。 1" 20"」

（症例 S-25）

相貌化的・合体的知覚様式

「8° 八 色どりにちらばったような……そうかわ、キリフキしたみたいな、その……きれいに、あっちこっちから皆がひとつのものを頂点にたくさん、たくさん出てくるような、ひきつけられるようにあっちこっちから群がってくるような、そんな感じ、雑談しているみたい、ひとつの広場に集まってきて、集まっているような、そんな感覚がする。鳥合の衆というかね。何だか自然な感じがします。自然な感じで…… - 3° 40°」

(症例 Z-19)

以上の具体的な基準に照らして評定したのち、われわれ5者間の一致率を検討することによって、信頼性をチェックし、さらに、そこで評定された対象の知覚様式と、これらの属している臨床群とのつき合わせにおいて妥当性を検討することにしたい。

III 結 果

1. 形式分析的検討

まずスコアリングの結果についてであるが、われわれはこうした分析を終局の目標とするのではなく、またこれら接近法によってのみ結論づけようとするわけではないけれども、一応、従来の伝統的な手続きに従って、両群におけるスコアリング各指標の総数と平均をあげておけば、次の表3のとおりになる。

カードXにおける反応の形式的分析に関するこの一覧表からも、全体像の比較としては、かなり顕著な相違をみだすことができる。すなわち、反応数や反応時間に関しては分裂病群の方がより短く、初発反応時間はより早い。W対Dの比率では、分裂病群は総数で26:21であり全体反応優位であるが、質的には形態水準(+) 25.5%で非常に低いものである。内容的にも、未分化であいまいな絵画や抽象、顔反応が目立ち、これがWの数を増加させていると考えられる。他方、躁うつ病群のW対Dの比率は17:43であり、形態水準(+ = 74.6%)もよく、現実的、具体的、常識的な把握能力が示されている。このことはまた、「Organization」のあり方において、最も明瞭にあらわれている。すなわち、分裂病群では、受動的で未分化な傾向を示す「Org. A」が88.5%であるのに対して、躁うつ病群では27.4%であり、より分節的に眺め、またそれを総合しうる傾向を示している。決定因に関しては、分裂病群が形態反応と、他には極端に色彩形態反応および純粋色彩反応が多く、情緒統制が非常に悪いのに比して、躁うつ病群においては、人間運動反応や動物運動反応に富み、全般に均衡がとれている。さらに躁うつ病群にあっては平凡反応も多く、感情カテゴリーに関して不快感の率が低く、「rec.」反応等

表3 分裂病群と躁うつ病群におけるロールシャッハのカードXにおける各指標の総数と平均値

ロールシャッハスコアリング指標	分裂病群		躁うつ病群		P	
	総数	平均	総数	平均		
R	47	1.57	63	2.10		
R + T	352*	11.73*	518*	17.27*		
R - T	1819*	69.96*	2652*	94.71*		
W	26	0.87	17	0.57)**	
Org. A	23	0.77	5	0.17		
Org. B	3	0.10	12	0.40		
D	21	0.70	43	1.43		
S	8	0.27	0	0		
F	14	0.47	16	0.53)*	
M	4	0.13	18	0.60		*
FM	2	0.07	15	0.50		**
m	3	0.10	2	0.07		
FC	5	0.17	11	0.37		
CF+ C	22	0.73	9	0.30		*
F. level (+)	12	0.40	47	1.57)**
F. level (-)	35	1.17	16	0.53		
A + Ad	17	0.57	33	1.10	**	
H + Hd	8	0.27	19	0.63	**	
Art	7	0.23	3	0.10		
Abst	8	0.27	3	0.10		
Face	5	0.17	0	0.10		
Rec	2	0.07	5	0		
P	0	0	6	0.20		
Hostility	19	0.63	7	0.23)**	
Anxiety	31	1.03	17	0.57		
Bodily	1	0.03	2	0.07		
Tot. unpl.	51	1.70	26	0.81		**
Dependency	3	0.10	16	0.53		
Positive	7	0.23	18	0.60		

χ^2 test - * P < 0.05 ** P < 0.01

の快的感情や依存感情が多くみられている。これら全般的な諸傾向は、ことに分裂病群に関してはすでに一般に指摘されているロールシャッハ特徴とよく一致している。このような一致が、カードXのみにおいても、否むしろこのカード単独において、より明瞭にみられるということは興味深いところである。他方、躁うつ病群に関しては、従来、臨床群を症状論的に躁病とうつ病にわけて各特徴を示した研究が多く、本研究におけるように躁病とうつ病に共通の「躁うつ病の基礎過程」と対応させた研究はみられないので直接の比較はできない。

しかし、ここでみいだされたあり方は、むしろより正常な平均人に近いように思われる。

こうした伝統的な量的分析に準拠した場合でも、われわれの仮説、別のいい方をすれば、「分裂病者は図版刺激に直面して、そこに直感的に生きいきとした背景的な雰囲気性を感じることができず、分散した諸部分への対処は非常に苦手なこととなって、困惑し混乱してしまうのに対し、躁うつ病者においてはそのように直感的に雰囲気性を感じることに関しては問題なく、むしろ逆に往々、刺激が複雑多彩であることから、反応形成が促進され、分散した諸部分も結合、統合されるという知覚様式が示される」という仮説が傍証されているといっ

2. 「知覚様式」の検討

以上の伝統的手法にもとづく形式分析的な量的比率の比較による知見は、しかしあくまでも相対的な、一般論的なものであって、臨床場面でわれわれにいわば絶対的に与えられることになるひとりびとりの個人のプロトコル解釈にあたっては、かなり危険率の高い準拠枠とならざるをえない。そこで量的にではなく質的に、相対的にではなく絶対的に、生の具体的な反応全体から、各個人が基本的にどのような知覚様式のうちにあるのかということ、を、さきにあげた代表例の基準に従って、われわれ5名が独立に評定することにした。

信頼性について

その全被験者に関する各評定者の評定結果について、まずその信頼性を検討するために、われわれ5名の評定者間の一致率に関してみてみると、次の表4のようになる。

以上のように60名の対象のうち、評定者全員が一致したものの26名、4人一致が22名、3人一致が7名、計55名であり、ここには非常に高い信頼性があるといっ

表4 両反応様式についての評定者間の一致度

知覚様式 一致度	断片化的・ 困惑的	どちらとも いえない	相貌化的・ 合体的	計
5人一致	17	1	8	26
4人一致	7	3	12	22
3人一致	2	1	4	7
不一致	1	4	0	5
計	27	9	24	60

うちの1名(S-10)が「断片化的、困惑的知覚様式」に属することになり、残り4名は「どちらともいえない」として判定された。

妥当性について

以上のように判定された各被験者の知覚様式とその属している臨床群とを対応させた結果は次の表5のとおりである。

表5 臨床群と反応様式との対応

知覚様式 臨床群	断片化的・ 困惑的	どちらとも いえない	相貌化的・ 合体的	計
分裂病群	25	4	1	30
躁うつ病群	2	5	23	30
計	27	9	24	60

χ^2 test - P < 0.01

このように、「断片化的・困惑的知覚様式」と判定された被験者27名のうち、25名が分裂病群に属し、「相貌化的・合体的知覚様式」と判定された24名のうち、23名が躁うつ病群に属している。この対応は、あらためていうまでもなく、一見してきわめて明白である。両群とも10数%が「どちらともいえない」として判定不能ではあるけれども、逆転して反対の判定がなされた率は非常に低いものであった、ということにはとりわけ注目されなくてはならない。

以上の点から、ここで問題となっている妥当性に関しては、非常に高い確率で検証されうるのであり、従ってわれわれの仮説は支持されたことになるといえる。さらにまた、このような病者の基本的疾病様態を弁別する上で、カードXが非常に重要な意味を有しているということも立証されたと考えられる。

IV 考察

1. 具体的な言語化の形式について

ここでは、以上に明確化されたことに関して、ことに従来のスコアリング体系においては直接にとりあげられていない被験者の反応形成のあり方という面について、個々の具体的な反応にかえて考察しておくならば、われわれの仮説にもとづく両知覚様式は、次のような言語化の形式において、とりわけきわだったものとなってくるように思われる。すなわち、分裂病者においては彼ら特有の知覚様式に応じてこのカードXは、たとえば「落ち着きなくなる」「複雑怪奇で人に恐怖感を与える」「バラバラ、支離滅裂、滅茶苦茶な、非常に汚い」「疎

外、孤立して勝手にガチャガチャやっている」「幼稚でまとまりのない」「気違いかいた、みただけで分裂病になっちゃうような」「何をかこうとしているのかわからない、不思議でしようない、奇妙な」「不均衡、アンバランスな」「整理整頓されていない」「ゴチャゴチャありすぎて調和のとれていない」「抽象的なものが直感的に捉えにくい」「自分の感情や感じが奥にすいてまれてなくなる」「気持のわるい」「心が散らばっている」ような印象を与えるカードとなるのであり、また躁うつ病者にとっては、たとえば「非常に美しい、動物の世界のお祭り、非常にはなやか、希望というのも連想できる、生物学的なお祭りだから、人間の世界にもあてはまる、夏祭りの浴衣とかちようちんの灯とかを連想させて非常に豊かな感じ」「全体としてひとつの美しい抽象画」「植物園、きれいな春ですね」「偶発的なものによって美を表現する抽象派の絵画」「色彩がきれい、あざやか、他のカードにはない明るさがある」「あちこちから皆が、ひとつのものを頂点に、たくさんたくさん出てくるような、ひきつけられるように、あちこちから群がってくるような感じ、ひとつの広場に集まっているようなそんな感覚、何だか自然な感じ」「色が合成されている、何かこう支えあっているというか」「いろんな昆虫とかは虫類がウヨウヨ集っている」「物体と物体が合体した感じ、とけあう感じ、心と心がふれあう」「人や虫や犬がいっぱいくっついていて」といった印象の感じられるカードとなるのである。

躁うつ病者においては、「支離滅裂的な」あるいは「分裂的な」といった言葉が語られたり、あるいは、ことうつ病者において、必ずしも豊かな反応内容が示されなかったりする場合もあるけれども、反応全体に注意すれば、たいていはその背後に相貌的、合体的な知覚傾向の存していることが感じとれるはずである。

以上のような両知覚様式は、これが決して症状論的な疾病類型に関してではなく、基礎過程、いいかえれば、その人の基本的な生き方ということに関して対応している点において、単にすでに発病した病者においてだけでなく、発病前の、あるいは寛解後の、そしてさらには正常者の中の人間学的類型としての「分裂気質者」や「躁うつ気質者」においても、みいだされるはずのものであるということ、ここでおいに強調しておかなくてはならないことであろう。

2. 判定錯誤と判定不能の反応について

次にここでは、両知覚様式の評定にあたって、逆の判定がなされた場合、あるいは3名以上の一致が得られなかった場合、および3名以上の一致はしていても、それ

が「どちらともいえない」と判定された場合に関して、考察しておくことにしたい。

まず、評定が逆転しているものは、計3みられるが、その内容は、分裂病群で「相貌化的・合体的」と判定されたものは、「南の海の中」(S-9)であり、相うつ病群で「断片化的・困惑的知覚様式」と判定されたものでは、「よくわからない」としてカラーの指摘のみをしている単相性うつ病者(Z-10)の反応と「天国と地獄」(Z-17)の反応がある。また、判定不能は分裂病群では4、躁うつ病群では5、計9みられるが、その内容は「反応拒否」が2、「顔、能面」が2、「天国と地獄」1、その他「虫、人間等色々」が4である。このような評定不能が出現する第一の理由としては、まずカードXという単独の1カードのみを素材にすることの限界があげられる。従って実際の解釈のように10カードの反応全体からその知覚様式を読みとるようにする場合には、この判定はそれほど困難なことではないように思われる。

また、参考までに、この60例において両臨床群のどちらかに、特異的にあらわれている内容の主なものをみると、次の表6のごとくになる。

表6 両臨床群に特異的にみられた反応内容

臨床群	分裂病群	躁うつ病群
気違いの絵	4	0
顔	5	0
お祭り	0	2
天国と地獄	0	2
固着反応*	0	7

* これらは名大スケールにおける「感情カテゴリー」の「依存感情」に属する「Clinging」反応のことであるが、これにはたとえば「ひっついていて」「くっついていて」「しがみついている」「よりかかっている」「へばりついていて」といった固着的、密着的内容がスコアされる。

「気違いかいた絵」というのは、被験者がこの図版に直面して、困惑・混乱してしまう結果、それ以上の内的破綻を防禦するために、外界を蔑視的につきはなし(Hostility — depreciation)、無理矢理に「遠ざける」(池田博和他, 1975)ことのあらわれとして出現する、かなり分裂病者に特徴的な反応であると考えられるし、また「顔」反応についていえば、相貌的な知覚をする躁うつ病者においては、まさに相貌そのものである「顔」は出現せず、相貌的な知覚が困難で断片化的となってしまう分裂病者において、むしろかなり特異的に「顔」が

多く指摘されるというきわめて逆説的な興味深い事態があらわれてくるのであるということが出来る。以上の二点に関しては、さきあげた村上他（1977）において、典型的な事例研究から詳細に考察したところであるので、詳しくはこれを参照していただければ幸いである。

「お祭り」や「天国と地獄」の反応は、そこにある基本的な生気にみちた雰囲気的気分性を感じとる相貌的な知覚のあり方の結果であることは明らかであろう。「天国と地獄」に関連した内容を述べている2名の被験者はいずれも、逆転した評定および評定不能として一致されているけれども、これはおそらく、天国と地獄として不安感情をとまなびきさかれるような印象を与えることにおいて、断片化的な傾向が感じとられたものであろう。しかしながら、このような反応形成を可能にした根底には、そもそも相貌的知覚のあり方が存しているのことに注意されなくてはならない。こうした「天国と地獄」といった、いわゆる「宗教的反応」が非定型精神病において、かなり特徴的にあらわれてくるものであることは、すでに村上他（1967）によって指摘されているところでもある。

さらに「固着反応」が躁うつ病群においてのみ、多く反応化されていることはまた、躁うつ病者が「合体的知覚様式」のうちにあるということの、もうひとつの証左となるものである。

以上、これらのことをふまえておけば、知覚様式の判定にあたって、判定困難となったり、逆転したりする可能性は、かなりの部分、低減されうるものであると考えようと思われる。

V 要 約

以上のように、本研究ではロールシャッハ・カードXにおける反応に関して、分裂病群と躁うつ病群にそれぞれ特徴的であると思われる「断片化的・困惑的」、および「相貌化的・合体的」という知覚様式について検討を加えた。

その結果、われわれの仮説は、伝統的手法による形式分析的な一般的検討によっても、支持されうるものではあったが、しかし、より絶対的、個別的な次元での検討

において、すなわち、個々の被験者の基本的な知覚のあり方に関して、われわれが直接に具象的な反応のしかたそのものの中に身をゆだね、その反応全体に投げかけられている被験者の知覚様式を、いわば直観的によみとってこうとする、現象学的系譜をふむ質的な分析をおしすすめることにおいて、より明確に、われわれの仮説は検証されえたものであると考える。

そしてまた、このような知覚様式をあらわにするのにあたって、カードXは、——未だ他の各カードとの比較検討をしてはいないので、「最も」そうであるとは明言はしがたいけれども、少なくとも「かなりの程度」——、有効なものであることも明らかにされた。すなわち、分裂病者にとって、カードXは非常に対処しにくい、やっかいな、不得意なものとなるのに対して、躁うつ病者にとっては、むしろかなり反応のしやすい、生きいきとした情緒性と生命性に富んだ内的気分性のあらわれやすい、そして結合的に統合されやすいカードとなるのである。

文 献

- Minkowska, F. 1956 *Le Rorschach-A la recherche du monde dei formes*. Desclée de Brouwer, Paris. (久間利昭 1961 F. ミンコフスカ《ロールシャッハ・テスト——形態世界の研究——》ロールシャッハ研究IV, 225-238. 誠信書房 による)
- 池田博和・村上英治・藤岡新治 1975 精神分裂病者における「人間学的均衡」としての距離 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科) 20, 51-81.
- 池田博和 1976 「偽躁うつ病性分裂病」について 名古屋大学大学院教育学研究科1975年度修士論文 (未公刊)
- 村上英治・武田徹・萩野惺他 1967 非定型精神病者の Rorschach 像 日本臨床心理学会第3回大会発表論文集, 45.
- 村上英治・渡辺雄三・池田博和・細野純子 1977 ロールシャッハの現象学 東京大学出版会

RESPONSE MODES OF THE SCHIZOPHRENICS AND THE CYCLOTHYMICS
IN THE RORSCHACH TECHNIQUE

— These comparative examination on the “card X” —

Hirokazu IKEDA, Eiji MURAKAMI, Tohru TAKEDA, Fumiko MIYAMOTO and Teruaki MAESHIRO

Recently we have suggested that there were remarkably different response modes in Rorschach technique between the schizophrenics and the cyclothymics. That is, we could formulate that a way of response of the schizophrenics was in what should be named “fragmentary-embarrassing perception mode”, in contrast, that of cyclothymics was in “physiognomic-unifying perception mode”. In this study, we would verify this formulation by statistical investigation. It is, however, not only analysis of traditional scoring categories, but also investigation of total Rorschach behavior including so called “response attitude”, “thinking process” and “communicating style”.

Then, we five psychologists estimated independently every subject's Rorschach protocol to which mode categorize. Thus, we would try to get light on our assumption. Subjects were 30 schizophrenics and 30 cyclothymics. Selecting these subjects, we applied most strict diagnostic criterion which was consisted of “basic being structure”, “way of aging process”, “premorbid character” and “attack situation”, not only syndrome.

The findings on reliability as a coefficient of agreement among five estimators were as follows.

- (1) 26 subjects were made agreement of all 5 estimators.
- (2) 22 subjects were made agreement of 4 estimators.
- (3) 7 subjects were made agreement of 3 estimators.
- (4) Remaining 5 subjects were made no agreement.

Another findings on validity among estimators were as follows.

- (1) 25 cases were the schizophrenics in 27 subjects who were estimated as “fragmentary-embarrassing perception mode”.
- (2) 23 cases were the cyclothymics in 24 subjects who were estimated as “physiognomic-unifying perception mode”.
- (3) Although we could not categorize 9 subjects, there were a few contrary estimation.

From these findings, it should be said that our assumption were to be supported by many cases. We believe there is very significant meaning for psychotherapeutic practice to identify anthropological type of disease structure in Rorschach technique.